直訳読みと外国嫌いのインフィニテ・ストラトス

バンビーノ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

英雄にもヒーローにもなる素質も特にない青年が転生して、神様に〝ぼくのかんがえたさいきょうのうりょく〟を貰ってシノノなんとかっていう天才と出会い俺ＴＵＥＥしない話。

５割ちょっと本当です。

目　次

01．インフィニテ・ストラトス ―――― 1
02．インフィニット・ストなんとか ―――― 16

01．インフィニテ・ストラトス

男に特殊さはなかった。極々平凡な一般家庭に生まれて、当たり障りのない友人に囲まれて、苦難という苦難もなく、かといって楽勝ともいえない人生。クロネコが横切れば靴紐が切れたり、星座占いで一位ならお弁当に好きなおかずが入っている程度の不幸さと幸運で過ごした人生。

そして、普通の事故で幕を閉じた普通の人生。そんなものだった。

特殊なことと言えば死後のこと。彼に意識があり、目の前に神の使徒と名乗る不審者が存在したことか。パイプ椅子に腰掛けて自身を見下ろす彼女の突拍子もない言葉に、青年は間の抜けた返事しか出来ない。

「お前は死んだよ」

「はぁ……」

「なにをキョロキョロして、おいやめろ。ドッキリじゃない、隠しカメラはない――失礼なことを考えるな。あたしはキチガイじゃなくて神様の使徒ってやつだよ」

「思考を読むとかちょっと止めてほしい」

「あんたも頭のなかで罵倒を繰り返して読心が出来てるか試すのをやめな」

どうやら本当に心が読めるらしいと青年は認めた。

しかし、死んだよと言われて受け入れられる人間はそういないだろう。だって死んだと伝えられて認識するためには生きていないといけないのだから。死んだなら死んだという現実を知ることすら出来ない。

そのはずなのだが……自称神様の使徒は絶世の美女で周りの空間は奥行きが認識できない不思議ワールド。青年は現代科学の結晶という可能性を留意しつつも一旦彼女の話を受け入れることにした。

「真に受けるのが馬鹿馬鹿しいんだけど、ならテンプレートな神様の手違いで殺しちゃったので特典をプレゼントして転生させてあげるみたいな？」

「ハッ、寝言は死ぬ前にいいなよ。神に手違いなんてあるわきゃねぇでしょ。あんたは死ぬべくして死んだよ。
特典は今ここにいること。転生は選択じゃなく流れだ。人が生きてる限り呼吸を止められないのと同じ、そうある限り止められないもんだと思って諦めな」
「転生が嫌ならここで人生を諦めろと」
「いや、転生してから自殺でもしな」
「悪魔か!?」
「天使だよ」
本気で転生は強制のようであった。
彼としては何故そうまでして転生を求められるのか疑問が尽きない。自分が転生しなければ止められない悲劇があるだとか、果てなき災厄から無辜の民を救えだとか、そんなことを望まれているのかと脳裏に過った瞬間に天使が鼻で笑う。あ、これそういうのじゃないなと青年も察した。
「もともと世の中にゃとんでもないやつがいるんだよ。歴史のターニングポイントをいつでも創れるような奴さ。
それを強制的に造って送り込まれるのが転生者。理由は高潔なものから俗物的なものと色々さ」
「つまり、俺も」
「いや、あんたはあたしがそのままで送り込む。言ったろ？　特典は死して尚今ここに存在していることってさ」
――平凡を以てして非凡を貶めてやりな。天使はシニカルに笑って言葉を吐き捨てた。
彼は呆けた顔で『うっわ中二病』と思った。天使はそれを読み取りシニカルな笑みがひきつった。
「特別な力を持ったやつが出来ることなんて大抵予想の範疇さ。あんたみたいなのが何も起こさず何かを変える。そういうのがあたしの好みなのさ」
「神様とやってること違くない？」
「その神はバカンス中。こういうことするなら今のうちなのさ。なぁ

に、最悪神様印の転生者が追加で送られるだけさ」
「転生者ってそんなワンコ蕎麦のおかわり感覚で送られるのか……んんー、なんかもういいか。取り敢えず第二の人生を謳歌すればいいんでしょ？」
「いいね。転生に舞い上がってなにかを成そうとしないそういう性格が気に入ってたんだ。あんたみたいなのが死ぬのをどれだけ待ってたか」
目の前の存在が人の価値観で測るのならば割りとクソだと気付き始めたあたりで、神様の使徒は柏手をひとつ挟んで仕切り直す。彼の人生を一区切り、仕切り直して新たな人生に落とし込む。
羽ばたくように彼女の背から烏のような翼が現れ、青年の身体が光の粒子に包まれていく。そこで彼はようやく彼女が頂上のモノと認識するも、態度や思考は既に手遅れなので諦めた。
「さぁ、あんたの新しい人生（モノガタリ）の幕が開けるよ。最後くらいサービスで質問くらい聞いてやるさ。なにかあるかい？」
「転生する先の世界に名前はありますか？」
「そりゃ存在するさ。けど小説やアニメみたいなタイトルはないよ。その世界は確かに在るんだ。
神様のやつは面白がってその勘違いを正さないけど、あたしは言っといてやる。その世界に生きてるのはキャラクターじゃなくてひとりの人間だ」
この短い間で初めて見た神様の使徒の真面目な表情に彼は息を飲み――
「別にそういうのじゃなくて地球みたいな普通の名前です。あとオマケ程度に聞きたいんですけど使徒さんって何歳ですか？」
真顔でないない、ねーよと手を振りつつ気遣いを無下にし、オマケ気分で地雷を振りかぶって全力投球してきた。
怒筋が浮かんだ神様の使徒は綺麗な微笑みを見せて手を天に翳して、振り降ろした。
「――お前天誅な」
「ゴッパァァァ!?」

光の粒子どころではない、ゴン太の灰色レーザーに彼の身体が飲み込まれ手荒な転生が行われるのであった。

▽▽▽▽

――転生、ライトノベルや二次小説を比較的読んでいた彼がよく目にした単語である。

それらの物語のなかでどういう意図で使われていた単語か簡単に説明するならば、多くが強くてニューゲームといったのだった。

元いた自分の環境になにかしらの不満やストレスを抱えた主人公たちが、異世界やらへと跳ばされ不思議パワーや転生前の知識をもってして活躍するのがメジャー。ときには圧倒的弱者としてスタートしながらも成り上がるものもあったが、どっちにせよ転生前の知識、言わば前世の知識を活用していた。

商業しかり林業しかり農業しかり。戦術や兵器に至るまで趣味などとの理由付けをもっていた。

なるほど、たしかに学生時代に学んだ二毛作だか趣味で覚えた黒色火薬の製造法なり、そんなものをしっかりと記憶しているなら状況次第で役に立っただろう。

なんで異世界で物理法則とか化学式とか同じなのって無粋なツッコミは横に置こう。同じならば役に立つ、そういう話だから。

――しっかりきっかり覚えているなら、役に立つって話なのだから。

いったい大学生半ば、就職活動手前にさしかかった人間の何割が数学のあのややこしい数式を記憶しているというのか。いったい誰が原子配列を覚えているのか。

何がどう転べば転生などという荒唐無稽な出来事に備えて黒色火薬の作り方を暗記するというのか。農業の能率を記憶するというのか。

彼は両方ウンコが役にやつくらいのことしか覚えてない。クソほどの役にもたたない、ウンコだけに！

「覚えてることと言やぁ、就職のためのエントリーシートの書き方に面接時の礼節かね」
気ままにサボる隣の席の女子生徒の胡散臭げな視線が向けられた気がするも無意味な思考を止めることはない。
さすがに小学生レベルの勉学はどうとでもなる、と思うものだが社会や国語の漢字が怪しかったりするものだ。パソコンやスマホの弄りすぎだったろうか。レポートに論文、重ねてソシャゲに動画。脳内はブルーライトによって見事にパーになっていた。
こんなことならもっと紙媒体で本を読むべきだった。
転生した彼はつくづくそう思う……何故か神様らしき人物と話した記憶があやふやになり、なんとなく記憶が欠損している気もする。ゴン太レーザーはきっと関係ない。
彼はため息を吐いて顔も知らない神様へ問いかける。
――転生ってのはもとある世界のバランスを壊すものじゃなかろうか。微塵も影響を与えられそうにない俺は何をすればよかですか？

▽▽▽▽

目が覚めたときには手足が萎縮しているように感じた。冷静に落ち着いて『あ、転生したんだな』とか赤ん坊からやり直しかとか気にすることが出来たのは、俺という自我が発生してから数日を要した。
まずは発狂したかというほど絶叫した。しかしその身は赤ん坊そのもので母親に当たる人物は俺の叫びを夜泣きと解釈。空腹なのかお漏らししたのかとワタワタするだけ。違う、おっぱいじゃないしオムツでもない。
かくいう俺は寝て起きたら身体が急に萎縮してしまったとの認識だった。そりゃ叫ぶ、叫びたくもなる。
それから数日は思考を放棄して過ごし、なんとなく赤ん坊になってることを理解した。どこかのＳＡＮ値が音をたてて削れるような魔術を喰らったわけではない安堵とやはり突然赤ん坊になってしまっ

たことへの不安感の二律背反。
さらに日月を進めて幼稚園、小学校を過ごした日々はなかなかにしんどいものがあった。その頃には自分がこの身体で生きていかねばならないと諦めと悟りを開いていたが別の問題は山積みだ。
なにしろ中身は大学生とはいえ、ここでは子供でしかないのだ。斜に構えていれば他の子供からの迫害を受ける。オブラートを破るなら虐めを受ける。
正直なにを言われたところでダメージは負わない。それでも殴る蹴るの直接手段に訴えられると辛いって、ほら身体は子供そのものだし。複数人で来られると、いや最悪一対一でも負ける。

のでそれなりに周囲に合わせて過ごしてきた。

お陰さまで虐めを受けることなく中学生になりましたとさ。めでたしめでたし。
「……でもなぁ、中学程度までなら余裕と思ってたんだけどなぁ」
端をつまみ上げた教科書のページがパラパラとめくりつつ、誰かに聞かれれば正気の疑われる独り言が思わず口から溢れたていた。めくるめく目に入る歴史は大学生活のなかで忘れ去った偉人たちの名前や出来事。前世の知識は就活用にフィッティングされてたんだ。愚痴だって吐きたくなるってものだ。
つまるところ、転生して得することがなにもなかった。
この世界は前世となんら変わりのない日本。ウンコを使って黒色火薬を作ろうと、ウンコを肥料に農業をしようと意味はない。ウンコって単語が役に立ったのは小学校の低学年、登下校の道で落ちていたウンコで皆揃ってハシャいでいたときだけだ。畑の肥やしになれど俺の頭の肥やしにはこれっぽちもならない糞だった。
ちなみに農業は二毛作とかが有用っぽかった。ついさっき今日の社会で習って覚え直した。どうせまた忘れるけど。
転生ってこんなしょっぱいもんだったかね。ぶっちゃけ今の俺って世の中の見方が少しひねただけのガキになっただけだし。特別神

童と呼ばれるほど賢くもないよ。
神童というのならば、隣でノートパソコンをカタカタカタカタと打鍵してる女だ。髪は整える気はないのか伸びっぱなしで若干猫背にもなっている。あと美人か。
根暗に見えなくもないその風体ながらテストでは毎度トップ。なら先生からの受けがいいかと言えばそんなこともない。授業は平気で寝るしサボるし、中学校に平然とノートパソコンを持ち込む。いくら注意されても無視を決め込み、ひとりでいることが多い。ボッチよりも孤高って言葉が似合う彼女。あと綺麗だな。
今だってノートパソコンを覗き込めば、画面にはよくわからん図面が展開されてるけどさっぱり。俺なんかよりよっぽど転生者じみてる。少なくとも前世にこんなやついなかった。
「おいお前。なに勝手に覗いてるの？」
「お、し……の、のめ？　から話しかけてくるとか奇跡に近いんじゃねーですかね？　クラスメイトと話してるのも見たことないわ」
「名前違うし画面を覗き込まれたらさすがに文句くらい言うしそもそもお前誰だよ」
「それでその映ってるものってなんなんだ？　３Ｄでかっけぇくらいことしかわからないのだわさ」
げんなりしたように再び画面へと顔を戻す通称し、なんとか。名前は喉元まで来てたんだけどな、普段喋らないし忘れちまった。
止めろとは明言されてないので画面を覗き続ける。図面は人型に近い、ロボット？　横には英語で名称らしきものが書かれていた。
――Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｓｔｒａｔｏｓ．
それは何故か確証もなにもなく、されど平凡な俺にはどうしようもなく。お伽噺で終わらない非凡で素晴らしいものに思えてならなかった。だから、つい声に出して。
「いんふぃにて、すとらとす」
読んでしまったのだが、キーボードを叩いていた彼女は机に勢いよく頭をぶつけにいった。そのままキッ、というよりもギッ！　とこちらを睨んでくる。噛みつくよりも噛み殺す威勢だ。

「インフィニットくらい読めよ！　お前くらいの知力でも読めるだろ！」
「悪いが俺は英語をローマ字読みで覚えているからな。そうかインフィニットだったか。日本語訳で無限の……同盟休業」
「無限の成層！　ストラトスがわからないからって似たストライキを日本語訳するなっ！」
「ハッハッハ！　コイツはとんだ日本誤訳だったな」
「ああ言えばこう言う！」
　机をばんばか叩いて長い髪を逆立てんばかりに怒る様子は見ていて面白い。いや、そういう趣味なわけじゃなくてだな。中身が大学生なだけに周りの中学生に合わせるのが面倒で、しのなんとかみたいなタイプを見ている方がよっぽど楽しいだけだ。
　普段が誰も近づくなオーラを出してるだけに、こうして実際話してみるとキレッキレで笑えてくる。
　単純に俺の性格もひねてるだけって可能性もあるか。
「それでシノ、しめしめはデザインとか好きなのか？　もしくはロボットとか」
「私はそんな味を占めたみたいな苗字じゃないし、これはデザインじゃなくて設計図」
「え、ガンダム作るの？」
「ロボットじゃなくてパワードスーツの亜種だけど、いい加減鬱陶しいからどっか行けよ」
「エヴァか」
「話聞けよ。どっか行けって言ってるし、その取り敢えず自分の知ってる知識に当て嵌めてみたみたいな返事をやめろ」
　眼と声のトーンが割りとマジになってきている同級生女子。名前はまだ不明。し、から始まったはずなんだけどな。しましま、私はそんなツートーンカラーみたいな名前じゃない、的な会話が容易に想像できる。
　名前を聞くにもまずは自分から。今さら、このクラスになって月単位で日数が経過してるあたり本当に今さらなんだが名乗っておきま

すか。
「俺の名前は浦之助」
「……」
「おーい、したなめ」
「……ッ！」
「おしい」
　適当に名前を間違うも雰囲気が一瞬揺らいだだけに終わってしまった。なんとなく反応が返ってきそうな話題を振るもなかなか反応はなし。
　仕方ないので誰にも自慢できない、けど無駄に真似できる友人のいなかった特技でも晒してやらう。披露ではなく、晒すってのがミソ。
「けすのらうはえまなのれお」
「……は？」
「かたしうのんはくやうよ」
「たかしなはいるわちもき」
「俺の特技を、逆さ語一瞬で真似しただと!?」
「特技ショボ!?」
「お、なんかしたたかの素を見た気がする。あと気持ち悪いのは自覚あるんだが、すぐに真似できたお前も割りとキモい」
「私はそんな手強い名前じゃないし、女子にキモいとか言うなよ！」
　キィーッ！　とキーボードをばんばか叩く姿は割りと年相応かそれ以下。やっと素の感情的な見えた気がする。
　しかし、キーボードを叩いてるせいで画面上のパワードスーツ（仮）もとい無限の同盟休業、じゃなくてインフィニット・ストラトスがぐちゃぐちゃになってるのはいいのだろうか。よくなかったらしい、追加で怒られた。理不尽でなかろうか？
　――だいたい名前をまともに覚えてないなら興味がないんだろ。私はそうだしだから行動もそうなる。けどなんでお前は名前も覚えていない相手にやたらと絡んでくるんだよ。
　要約するとそんな感じのことを長々と言われた。というか途中から聞き流して最後に三行でよろって希望したら肩を落としながらま

んま同じ内容を伝えられた。
「なるほど、つまりしなやかは――」
「私はそんな弾力に富んでそうな名前じゃないし、しの後が母音三つ重なるのが地味に合ってるのが腹立つんだけど」
「ならそろそろ自己紹介しようぜ？」
「……言えばどっか行くのか？」
「そういえば教卓に名簿あったよな」
　言外に居なくならないという意思表示をすると彼女は頭を抱える。こんなにしつこい奴は初めて、ではなく二度目だったぁとかなんとか。
　先人がいたとは予想外。そやつは男か女かそこが問題なのだが。
「……篠ノ之束、これが君の名前」
「なんかいいシーンっぽくしようとしてるけど、お前が私の名前を覚えてなかっただけだからね？」
「およよよ」
「私の名前はそんな嘆くようなってなんで今さっき見たくせに間違うかな!?」
「いや、惚けただけなんだが」
「キィーッ！」
「やめっ、やめろぉー！」
▼　篠ノ之　が　飛びかかってきた　！
　頭脳派陰キャラ寄りとか思ってたら案外肉体派でアタタタ!?　掴まれた腕がもげる！　折れるじゃなくてもげる！
　馬乗りになった彼女の髪は乱れて顔がよく見える。やっぱり美人で、なんならいい香りまでするんだけど腕の痛みで幸せと不幸せがプラマイゼロだった。
「なんなんだよお前は！　私をおちょくって楽しいの!?」
「おちょくるのがというか会話が楽しいです！　だから話そう！　離して話そう！　俺たちまだ中学生なんだからまだこういうのは早いとイッでええぇ!?」
　痛い痛い痛い！　爪がちょっと皮膚を破った！　下（シモ）いジョークか

ましてる暇じゃなかったしガチ目にキレてらっしゃる。
「気になる女子がいたら話しかけたくなるじゃん!? 思春期特有のおチャラけた感じにもなっちゃうじゃん!?」
気になるの意味が思春期特有のそれと同じかはさておき話してみたかったのは確かだった。ので真面目に弁解したつもりが、篠ノ之の反応が過剰だった。過剰で、超過した分のエネルギーが俺の腕にダイレクトアタック噛ましてきた。
「……はぁ!?」
「ふぐぁあ!?」
「あっ」
篠ノ之の感情の昂りとともに腕がなんかブレイクした音がした。骨っていうか筋とかそういうのがミチッと。思わずといったふうに離された腕を抱えて踞る。ひっひっふー! ひっひっふー! 生まれそう! 瞳から涙産み落としちゃいそう!
チクセウ、年甲斐もなく泣きそう……中学生なら年相応か。なら泣いても、いやここで泣くのはダサすぎる。女子に泣かされるってのがもうなんか、ちっぽけなプライドがここで泣くなっていうから堪える。ちくしょう、神様も女子と上手くコミュニケーション取れるくらいの特典くれてもよかったのに。
「気になる女子って言われただけでそんな反応するなんて篠ノ之ったら初心(うぶ)さん!」
「涙目でからかわれたときの反応がわからないのは、私がコミュ障なせいじゃないと思うんだけど……保健室行く?」
「超行く……しかし、篠ノ之って見た目に反して力強いのな」
「細胞レベルで天才だもん」
ジンジンと芯から響く痛みに顔をしかめつつも会話を続行。過程はさておき、怪我させた罪悪感からか先程よりまともな言葉のキャッチボールが成立している。
「もしかして、雰囲気暗めでパソコンばっか弄ってるインドアモヤシって思ってた?」
「うん」

「即答で肯定されるとちょっとイラッてする」
「モヤシを萌やしに変換し直すと尚いいよな」
「は？　なにが？」
　ただし塩対応は尚継続。無視から塩対応になったと思えば大きな進歩なんだろうか。実年齢１４歳、合計年齢３６歳の俺にはよくわからん。
「……」
「……」
「……」
　放課後の閑散とした廊下をふたり並んで、話題が尽きれば無言になって歩を進める。外からの部活動に励む青春男女の声がまばらに聞こえる程度で静かなものだ。ボーイミーツガールとかやってんだろか。覗いて冷やかしたい。
「篠ノ之はどうして他人に興味がないんだ？」
「なんで急にそういう話題ぶっ込んでくるかな」
「話題に詰まった」
「チョイスとしてどうなの」
「俺のなかで一番無難だったのに……じゃあ、ＩＳ造ってどうしたいんだ？」
「へぇ、そっちの方が無難じゃない話題だと思うんだ」
　歩みを止めた篠ノ之が酷薄な笑みを浮かべた。告白する際の笑みなら歓迎なのに惜しい。というか反応から察するに俺は変なことを言ってしまったらしい。
　この会話は歩きながらじゃ駄目なんだろうか。左腕が尋常じゃなく痛くなってきてるんだけど、ためしに二三歩踏み出すと歩行は開始された。
「ＩＳはね、宇宙作業用のパワードスーツ。無数の未知を抱えた宇宙を探るとき、数多の危険から身を守るスーツ」
　宇宙船の外の作業では命綱が切れれば永遠に虚空をさ迷うことになるかもしれない。不意に飛来した宇宙ゴミに成す術なく身体を貫かれるかもしれない。真空の空間では人災であろうと天災であろう

と、なにかひとつトラブルが起きれば死に直結する。
すれ違った教師が信じられないものを見る目で見てきた。篠ノ之は毛ほども気にする様子なく会話を続ける。
「けど、このＩＳさえあればそんな些細な問題は解決しちゃうんだよ」
絶対防御という名のエネルギーシールドが通常の物理的ダメージを全て零にする。ＰＩＣは物体の慣性を擬似的に消失させ三次元機動を可能とする。ハイパーセンサーは３６０。近くのほぼ全方位を視覚認識可能とし、などなどエトセトラエトセトラ。
篠ノ之の話は理解できないところも大量にあった。特に理論とかさっぱり。けど、確かにわかったことはある。
つまるところ、わたしのかんがえたさいきょうすーつらしい。
「その一言でまとめられた私の心境わかるかな？」
「ブッ飛ばしてやりたい」
「正解」
「やめて、もうちょっとちゃんと考えるから拳を構えないで」
女子中学生に拳を構えられて心底びびってる奴がいた。当然俺だった。
頭のなかでは理解できないワードは削除していって簡略化した流れだけを組み立てる。そうするとなんとなくボヤけてるものの、なにをしたいかの輪郭だけは見えてくるよね。
「要するにあれか。篠ノ之は更なる宇宙の開拓でも夢見ているのか？」
「全然？　興味がない訳じゃないけど本題は別にあるよ」
輪郭もなにも見えてなかったよね。
「なら、それって」
「教えない。ちょっとは自分のない頭を使ってみたらどうかな？　はい、保健室についたよ」
「よく見ろ、頭は付いてるしあるだろ」
「舐めんな、よく見なくても見えてるから。比喩だよ」
これ以上話すつもりはないのか。タイミングよくか悪くか着いてしまい、不自然な金属音とともに保健室の戸が開かれた。

養護教諭は不在のようで、なら鍵を閉めておくべきではなかろうかという疑問はこの際飲み込んでおく。
さっきの話題が気になってそれどころじゃないのだ。自称細胞レベルで天才、実際に中学生にして卓越というか超越してる篠ノ之はなにを目指しているのか。あのバカみたいに高性能なパワードスーツはなにが目的か。
薬品棚を漁る彼女を尻目にないと言われた頭を働かせる。
実際のところ、篠ノ之が語った性能が中学生特有の痛いアレでないとすれば、それは世界が震撼するに違いない。それこそ世界の進む方向のターニングポイントに成り得る。
空飛ぶ鉄の塊の飛行機や岩山を吹き飛ばす筒であるダイナマイト。それらもまた画期的な発明であり世界を動かして――
「もしかして争いの火種にしようとかしてないよな？」
いつだって人は新しい技術を戦う手段としてきたんだ。より破壊力を持つものはより多くの人間を殺すため、より速力を持つものはより速く敵へ打撃を与えるため。
偉大な発明は残虐な殺戮手段に転じてきた。世界のターニングポイントは戦争のターニングポイントにも繋がってきた。
また、篠ノ之の笑みが深くなった。
「アハハッ、案外いいところまで思いつくもんだね。けど残念、戦争は起きないよ」
「起こらないにしても手段にはなるんじゃねぇかなぁ。量産されれば、まぁ今ある戦争で使われるだろ」
「ここをこうしてっと。ああ、その点に関しては大丈夫。量産されることはないだろうし戦争に多用することもないと思うよ。ううん、出来なくなる」
薬品棚から取り出した薬を混ぜこぜにして包帯に垂らしながら俺の言を否定する。異臭が凄いし色もグロいんですがそれを貼る気でしょうか。
「そりゃそのためのものだし貼るよ？　はいジッとしててね」
「うっわ、今までで一番イイ笑顔じゃ……イッッッ!?　ダァァァい！」

「簡単に言えば薬液が染み渡って千切れた筋繊維の断面を溶かして繋げてるからね。自信の試験薬だよ」
「うぐぁイデェ……待って、筋繊維千切れてたの？」
「うん。むしろ、私が一瞬でも本気出してその程度で済んでる時点で奇跡だけど」
「うっわ、ゴリラ」
——新たに篠ノ之の血管と俺の筋繊維がブッチ切れた。うん、ゴリラじゃない。ゴリラは心優しい生き物だからね。

０２．インフィニット・ストなんとか

「なぁ、浦。これ篠ノ之のやつに渡しといてくれないか？」
「おっす、之助！　連絡事項なんだけど篠ノ之さんに伝えといてよ！」
「悪いけどこれを篠ノ之さんにも」
「浦ちゃーん、しの……さんにもよろしくぅ！」
　彼がここ数日で話し掛けられた用件の半分はこれだった。初めはなんの気なしに快く引き受けるも、だんだんと頼まれる用事の方向性が同じベクトルと気づいた。というか気づかないはずもなかった。
　最後の奴なんて名前をうろ覚えだし、クラスメイトの名前を覚えてないとかどうかと。そう思う之助だったが束の視線に気づいて振り向く。
「篠ノ之、どした？」
「不愉快な思考を感じた」
「なんじゃそりゃ」
　そんな一幕を挟みながらも彼の疑問はもくもくと膨らむ。クラスメイトたちは急にどうして自分に束宛の用事用件を頼みに来るようになったのか。このままでは送り先篠ノ之束限定の宅配事業でも始められそうな勢いである。
「あっ、浦君いいとこに。修学旅行の件、篠ノ之さんに伝えといてくれないかな？　これ、しおりなんだけど」
　そんな折に話しかけてきたのは委員長。之助は名前を思い出そうと頭を捻るが委員長という慣れ親しんだ記号が邪魔をして出てこない。ついでにまたかという用件を持ち込まれてしまい、そちらへ思考がシフトチェンジ。
　委員長の名前は思考の加速に追い付けず置き去りにされてしまった。
「委員長までもか。なしてみんな揃って俺に頼む？」
「だってクラスで篠ノ之さんと普通に話してるの浦君くらいで……」
「またまたご冗談を」
「猫みたいな顔しない、本当なのよ？」

額を指で軽く弾く、所謂デコピンをしつつ委員長は苦笑する。歯痒そうな、痒いところに手が届かなさそうな表情。
「猫の手を借りるより孫の手をご所望のようで」
「ん、どういうこと？」
「やや、なんでもない戯れ言だし流しておくれ。それに任されて引き受けるのはやぶさかじゃないよ。委員長ですら篠ノ之を苦手としてるのは予想外だったけど」
「うーん、別に苦手な訳じゃないの。ただ篠ノ之さんと私たちのチャンネルが全然違うって言えばいいのかな。
　私たちの無線機は共通のチャンネルを開いてやり取りしているから大きな齟齬なく会話が成り立つんだけど、篠ノ之さんだけは全く違うものを使っている感じでコミュニケーションの成立自体が難しいっていうか……あ、浦君ごめん。チャンネルの意味わかる？」
「馬鹿にすんな。テレビのあれだろ？　あれだよあれ、うん」
「周波数」
「はい、ごめんなさい。しっかりわかってなかったです」
　この調子ではアドレスもメールアドレスとしてしか知らなさそう。住所と日本語に訳すこともわからないだろうなぁと思わず苦笑する委員長。なにも間違っていない。
「それでそのチャンプルーがなんだって？」
「チャンプルー（混ぜこぜ）じゃなくてチャンネルね。篠ノ之さんが皆に交ざってくれるならいいけど」
「すまん、周波数が全く違うだっけか。人とのやり取りを無線機を介したものに例えるなら、確かに会話は成り立ってないかも」
　人と人を無線機に例える。なら各々の無線機は同じ周波だからこそ通話が成り立つ。
　もしも全く異なる周波数を有する無線機がひとつ存在するならそれは孤立するだろう。無数とも言えるチャンネルの中から誰かが彼女を見つけ出さないかぎり、もしくは彼女と同じ特異なチャンネルを元から有さなければならない。
　つまりはその独立した存在が篠ノ之束と言いたいのだろうと之助

は解釈する。小難しい言い方するなと思いながらも口にはしない。
「だから私としては浦君がそんなに簡単に、普通に会話しているのが不思議でもあるんだよね」
「あぁ、でも例えが無線機だから難しく感じるけど、普通に人と人が会って話せば会話って成り立つだろ？　合う合わないは置いといて」
　委員長は無言で首を横に振った。
「合う合わないなんてのは自分で調整したらどうにでもなるんだよ。けれどそもそも相手に同等、もしくはそれに近しいと認識してもらわないと会話は成り立たないと私は思う」
「ええ、めっちゃ大人……俺は合わない人に無理に合わせるのは苦手だ」
「あははっ、私だって得意じゃないよ。けれど私を私として見てくれるならしっかりと話し合うべきでしょ？」
「はぁ、よくわからんけどわかったことにしとく。取り敢えず引き受けたし、篠ノ之には渡しとくわ」
「うん、お願いね」
　大人というか人としての器が大きい委員長。之助とほどほどに話を切り上げ彼の行き先を眺めていると、また篠ノ之束にちょっかいをかけに行っていた。
　篠ノ之束は鬱陶しそうにしながらも対応している。
　以前に委員長は篠ノ之束にコミュニケーションを試みたことがある。とは言っても雑談に興じようとしたわけでもない。持ち込み禁止のはずのＰＣを余りにも堂々と開くものだから思わず注意しに行った次第。
　そのときの結果は散々だった。無視に次ぐ無視、彼女自身も珍しくヒートアップし1時間ほど話し掛け続けた。糠に釘を打つか暖簾に腕押しした方がまだ手応えがあっただろう。馬に説法聞かせた方がまだマシな反応があったに違いない。
　苦々しい記憶を掘り起こされながら、ふたりを眺めている委員長。結論から言えば卒業まで会話が成り立つことはなかったが彼女はめげなかった。

▽▽▽▽

「そんでまた続きやってるん？」
「ナチュラルに私の作業の邪魔しに来るなよ。本当に面の皮も厚いよ」
「誰が国家規模で篠ノ之の邪魔してるんだよ」
「ナショナルじゃないから、ナチュラル……自然って意味だから」
　そういやそんな意味だった。こんなだから二度目の人生なのに英語が赤点ギリギリなんですよ。ハハッ、まだ中学なのに
「いや、待ってくれ。ならナチュラルチーズって自然に湧き出したチーズなのか？」
「違うに決まってんじゃん。なんだよ、その気持ち悪い発想」
　少しボケてもいつも通りナチュラルに塩対応される。
　うーん、この覚えたての横文字を使ってみるオジサン感。篠ノ之の使い方を聞くに間違ってないとは思うんだがな。
　けど、委員長を始めとしたクラスメイトたちはこの会話のどこをどう見て普通と抜かしているのか。お互いの怒筋と筋繊維を千切り合うような仲なんですけど。
　なによりも先生までも用事を頼んでくるあたり篠ノ之のＡＴ（あっち行け近付くな）フィールドの強固さが窺える。なるほど、だから篠ノ之と廊下で話しているとあり得ないものを見る目で見られていたのか。頑張れ新任教師美島先生、取り敢えず生徒に無視されて涙目になるな。
　しかし、実際に俺がプリントとか渡したところでお礼が返ってくるわけでもない。
「いらない捨てといて」
「それを私に伝えてどうするの？」
「ご苦労様、ゴミ箱に入れといてよ」
「……で？」
　だいたい端的な言葉で切り捨てられている。渡したものもだいた

い捨てられる。篠ノ之と話すいい機会だから全部引き受けるけどさ、てんで興味を示してくれない。もうちょっと聞く耳もって欲しい、ウサギ見習えよ。

渡したプリントを興味なさげに引き出しに突っ込んで作業に戻った篠ノ之は指を止める様子はなく、俺もいつも通りに勝手に画面を覗き込む。顔を少ししかめられたものの物理的に追い払われないのでセーフ。ちなみに引き出しは既に満タンで少し溢れてきている。これがポストなら事件の臭いがするんだろうけど、篠ノ之の引き出しは紙の臭いで満ちているに違いない。

見たことのないＰＣに３Ｄモデルで描かれるイン……インフィニティ、違うな。インフィニット・ストラ……。

「インフィニット・ストライプ」

「それ無限のシマシマァ！　薄々気づいてるけどお前英語の成績悪いだろ!?」

篠ノ之の視線が画面から俺に向かった。それに少しいい気になったので調子に乗って英語を使う。

「Ｔｈａｔ，ｓ　ｌｉｇｈｔ！」

「ｒｉｇｈｔの発音がｌｉｇｈｔ（ヒカリ）になってるし」

「え、マジで？」

「お前はなにも考えずに話してるし、むしろｌｉｇｈｔ（薄）だったね」

「そういや通信端末も軽量化されて薄くなってるよな。むしろ空間投影とか出始めてｌｉｇｈｔ（光っ）でｌｉｇｈｔ（薄）」

「だから単語拾って脊髄反射で会話するのをやめろ」

そう、インフィニット・ストラトス。横文字は相変わらず苦手なものの、篠ノ之が訂正してくれるのでいいや。

「けどＲとＬくらい大差なくないか？」

「は？　右（Ｒ）と左（Ｌ）は大きな差だろ」

「全くもってその通りだったわ」

「……正直、ＲＬで右左って通じたことに驚きだよ」

「ゲームのコントローラーのおかげだな」

「清々しいくらいにくだらない理由だね」

まぁ、篠ノ之とのコミュニケーションなんてご覧の有り様である。軽口と罵倒が行き来するのが普通の会話っていうなら確かに普通に会話できてるけど、俺のなかでは普通って言わないかな。

会話もほどほどに篠ノ之は設計に戻って、俺は画面を覗き込む作業に戻る。相変わらず嫌そうな顔をされるも、そういえば初めてのときみたいに噛みつかれることはなくなった。

素人目ながら徐々に精密そうなところが設計され始めている。以前に見たときには一目でロボットとわかったあたり、外郭から描き始めていたらしい。

インフィニット・ストラトスは目を覆う、あれバザーじゃないな。えっと、ほらバイザーだ。頑張った俺、よく出てきたよ。危うくヘルメットで妥協するとこだった。

……えっと、それでだな。その西洋兜のバイザーを機械的な見た目にした風なやつ。それが頭部についているんだが前は見えにくくないのだろうか。

俺なんかは体育の剣道のお面ですら前が見にくいと思ってるので、線が数本入っただけのような面を被ったら事故るんじゃなかろうか。

「と思うんですが篠ノ之先生、そのあたりは搭乗者の腕次第になるんでしょーか？」

「誰が先生だよ……別に視界の心配はないよ。インフィニット・ストラトスはハイパーセンサーで視界をほぼ３６０。まで拡張させるから」

「車が下がるときに後ろ見れるやつの全方角版みたいな。凄いじゃん、車に積んだら死角がなくなって事故減るじゃん」

「はぁ……なんだろうなぁ。別に間違ってないけどさ、お前が話すと一気にスケールがしょっぱくなるこの感じ」

「事故が減ることはしょっぱくなかろうが」

なんなら篠ノ之の塩対応の方がしょっぱい。塩分過多なのでそろそろ糖分とは言わないけどちょっと薄まってこないものか。

そも篠ノ之が中学生離れした考えをしているのが一番の原因じゃなかろうか。俺だって仮にも転生してきたわけで学生離れしている

はずなのに篠ノ之と比べれば塵芥に等しくなる。いやいや、お前二回目の人生でも赤点取りそうじゃんとか置いといて。

――委員長のいうチャンネルがどうこうの話。たぶんあれで例えるなら、俺も転生者っていうワケわからんチャンネル持ってるから篠ノ之と話せてる可能性。

まぁ、それは違う気がするんだよなぁ。だいたい篠ノ之は周波数とか電波じゃなくて次元が違う。ひとりだけスマートフォンとかいう次世代通信機器使ってる感じ。そりゃ無線機で電波が通じるわけがない。

ほら俺は転生したとかいうおかしな電波設定だから、上手くおかしな電波同士でギリッギリ通じたんじゃないかな。

とりとめなく無駄な思考をしていれば、篠ノ之が不意に振り向いて質問を投げ掛けてきた。

「……お前はさ、私の作業見ていて楽しいわけ？」

「それなりには」

「あっそ」

作業を見ているのがというか篠ノ之といるのが楽しいんだけど。これ小汚ないおっさんが相手なら早々に立ち去ってるかもしれない。

そっけなく返事をしてまた画面に視線を戻す。

「しっかし真面目に考えてみると人間の視野を広げるって無理じゃねーの？　最近出始めた空間投影型の画面でも球型の３６０。撮影して映すのは無理だろ」

「なんで急に真面目に考えるかな、調子狂うし……あと画面くらいディスプレイって言えないの？」

言えない、覚えてなかったから。

ディスイズプレイング、意訳は〝これのなかでプレイしています〟ってなるわけだ。

テレビっていう箱の中で競技が行われている様を英語で表し、それを省略したのがディスプレイ。これは昔に日本でオリンピックが開催された頃にテレビが普及し始めたためにそう呼ばれ始めたんだよなぁ。

つまりはなんちゃって片仮名英語で実は日本語。
「篠ノ之、知らなかったろ？」
「嘘だよね？　お前さっきまでディスプレイの意味知らなかっただろ」
「はい、嘘です」
一瞬で看破された。はい、たぶんディスプレイは正真正銘の英語だよ。
「真面目に話したかと思ったら急にふざけるし落差どうにかならないの？」
「会話もジェットコースターも落差ある方が楽しいかと思って粋な計らいを、すまん嘘だから無言で襟首掴むのやめてくれ。ちょっとそれらしいこと言ってみたかったんだ」
「はぁ……まぁ、それらしいと言えばそれらしかったよ」
「そうか？　因みにＵＮ〇ってカードゲームは人が色や数字を考えるときに基本的に右脳を使うことからυＮｏって名前になっていてな。まぁ、利き手が違うと使う脳も逆になるんだが」
「嘘だよね？」
「はい、小粋なジョークでした調子のってごめんなさい」
額に青筋が浮かんでいる。そろそろ作業の邪魔をし過ぎの合図なので大人しく関係ない雑談には撤退させる。
思考を真面目路線に変更して話さねば……えっと、なんの話題だったか。そうだ、たしか視界３６０。まで拡張させるの話だった。
「……で実際のところどうなん？」
「あ？　なにがだよ？」
「視界を広げるというあれのことだよ」
「私は出来ないことを出来るっていう無能じゃないよ」
「んー、なら自分のいる位置を俯瞰的に見るためのビットみたいな衛星でも用意するとか。それが空間投影されるとか」
俺の予想を聞いた篠ノ之は険のある表情を少し和らげた。
「へぇ、お前って案外柔軟な頭してるよね」
「なら正解か。俺も真面目に考えれば意外と」

「大ハズレだけど？」
上げて落とすのなんなのか。
そこから始まった篠ノ之のハイパーセンサーについての講義は日本語なのに割りとわからなかった。行き過ぎた科学は魔法になるんだなって。ラジカル・マジカル、インフィニット・ストラトス講義始まりました……理論的って英語でラジカルじゃなかった気がする。
以前から何度も説明をねだっては聞いてきたけど、話の途中に拡張領域とか皮膜装甲とか専門用語が出てきて余計に混乱する。ＰＩＣは豚かと思ったら違ったよね、豚はピッグだったよね。まぁ、わからない言葉が出るたびに質問しては舌打ちとか溜め息とセットで解説してもらったんだけど。
ちなみに以前聞いた拡張領域も皮膜装甲もカタカナに直されてたはずなんだけど忘れました。
「あー、バスケットとスキンケアーみたいな雰囲気だった」
「拡張領域（バススロット）と皮膜装甲（スキンバリアー）。お前の頭の容量どうにかならないの？」
「うーん、こればっかしは駄目だったわ。前のときも鑑みるに容量というか魂が拒絶反応とか示してるんじゃないかって説が濃厚。篠ノ之もあるでしょ、どうしても駄目ってもの」
「ないよ。細胞レベルで天才の私を舐めないでくれるかな？」
「えっ？」
「なんだよその顔は」
その顔はって言われても、まあどんな顔してるかは自分でわかる。お前社交性駄目じゃんって顔してる。
「煩いよ。そもそも社交性なんて社会って枠に収まる奴だけがしがみついていればいいんだよ。私は社会って枠にわざわざ当てはまってやるつもりなんてないし、必要なら社会を私に適応させてやるから」
厨二病かよ。そう冗談めかして流すタイミングを逃した。
篠ノ之の声のトーンがマジだったから。凄みのあるドスを効かせた低い方のマジトーンではない。実は私英語喋れるの、くらいの普通に普通より少し優れたことが出来るかのように語られたものだから、俺も普通にふーん凄いネって流してしまった。別にだからどうし

たって話だけどさ。虚言でも妄言でも戯言でも、なんなら真実でも今の会話の内容的には流してしまってもいいや。
「ま、社交性も社会も必要ないならないでいいんじゃなかろうか。俺にとっての英語みたいなもんだな」
「いや、お前にとっての英語は苦手なだけだろ。というか随分簡単に流すね。こういうこと言うと大概は虚言だ妄言だおかしなこと言うなって嗜めたりしてくるんだけど」
「やれるならやればいいんじゃなかろうか。嘘ならそれこそ流すに限る」
　中二病って時間経過が一番の特効薬。実現出来るなら俺みたいなやつがなにか言ってもなにも変わらないし、結局どうあれそのまま成るように成ればいいよね。
「あと何気ない発言を重く受け止められて返されてもウザったくない？」
「ウザいね」
「でしょ？　人間、育てば社会に出るっていうけど別に社会って環境に進む必要もないし。社会を作り替える側って選択肢も大いにありだし」
　政治家とかそういう方面。それはまた社交性がいるのかもしれないけど篠ノ之ほどのスペックなら、敢えて篠ノ之から合わせないでもある程度は相手から合わせてきそうだし……あ、合わせてきても無視するのか。やっぱり駄目かもしれんね。独裁国家になりそうだ。
「ふーん、お前はちーちゃんとは全然違うこと言うよね」
「そりゃあ、俺はちーちゃんじゃないし」
　ちーちゃんとやらはきっと友人としての心配と良識的に考えて小言を言ってるはず。俺は前世の浅い経験ありきで篠ノ之のスペックなら多少不遜な生き方しても大丈夫だろうって無責任なこと言ってる。
　おおよそ凡庸な俺が思いつく社会ってものが、篠ノ之にはどうしても合いそうにないというか似合わないってのも少なからずある。俺も昔はヤンチャだったとはよく聞く台詞ではあるし、聞いてて楽しく

ない台詞でもあるんだけど、篠ノ之が丸くなる未来像なんてもの微塵も想像できないわけで。
「篠ノ之はちーちゃんに想われてるんだな」
「私みたいなのを放っておけないタイプなんだよ」
　吐息ひとつ溢してそっぽを向く篠ノ之はなにを思っているのか。これがただの青春の一頁なら照れ隠しで見えていない顔は朱色に染まってるところだけど、篠ノ之なら単純にゲンナリした顔をしていてもおかしくはない。少なくとも俺から見えている耳は赤く染まっているなんてことはない。
　窓の外を見れば逢魔が時に相応しい陰り具合。委員長と別れてから篠ノ之と存外時間を潰していたらしい。
　日中には頭上から燦々と照らしてきた日光も朱色に染まり温かなものへと変わってきた。橙に染まった教室もあと半刻もすれば薄暗くなるだろう。
　もう一度、目の前のそっぽ向いた彼女を見るもその側頭部からはなんの感情も読み取れやしない。夕陽に照らされて赤くなってるのか、はたまた照れているのかなんて疑問を挟む余地すらない。紅みがかった髪が陽光で綺麗に反射してるだけだ。ちょっと眩しい。
「さてと、俺はそろそろ帰るけど篠ノ之はどうする？　帰るなら送るくらいするけど」
「まだ残るからさっさと帰れ。というか私より強くなってからほざけよ」
「辛辣ゥ！　ま、いくらゴリ、強くても女の子なんだから気を付けろよ？」
「おい、待て。なんて言いかけた？」
「ご立腹（ゴリっぷく）してても口が悪すぎない？　って言おうとしていまさらかと思って言うの止めたんだ。いやいやマジだって止めろよ拳を下ろせって」
　ゴリラ染みた力してるとか言ってないし、本当そんなこと篠ノ之みたいな可憐で儚げな少女に対して思うわけないじゃないか。そりゃもう全くもってさっぱり思ってないウホ。

「……今回は見逃してあげるよ。新月の夜には気を付けろよ」
「それって長い視野で見たら見逃してなくね？　まー、いいや。そいじゃまた明日」
「風邪でも引いて休めバカ」
「なら大丈夫だ」
「は？　……あっ」
　傾いた陽光とパソコンの光で照らされるだけの薄暗くなった教室の明かりをつけて廊下へと出る。なにかに気付いたような声を背にヒラヒラと手をふってバイバイ。バカは風邪引かないから明日も来るよ。
　入れ替わるようにひとりの女子生徒が教室内に入っていく。艶やかな黒髪に斬れるような眼が印象的な、うん擦れ違っただけだからそれしかわからんよね。
　別に彼女に興味がある訳じゃなくて、篠ノ之しかいない教室に入っていってなんの用かとそっちが気になっただけ。それも些末なことで引き返すほどのことでもなし。
　今日の夕食の方が気になっているほど。仕事で家を空けていることの多い両親だけど、今晩は例に漏れず家にいないし……あ、晩飯ないなこれ。
　冷凍庫の冷凍食品なにがあったかと思案しながらの帰宅路。校門から学校を振り返れば教室の明かりはまだ点いていた。

▽▽▽▽

「束、待たせたな」
「ううん、やりたいことしてただけだし全然だよ」
　之助が擦れ違った少女は篠ノ之束と当然のように会話をする。クラスメイトや之助には仏頂面しか見せない篠ノ之束は柔和な笑みを浮かべて対応する。
「ちーちゃんこそ部活動お疲れさま。久々だったでしょ、どうだった？」

「ああ、それなりに得るものはあったさ」
「まー、ちーちゃんはうちの道場でとことんやってるしねぇ。オブラートに言ってるけど部活みたいなお遊びじゃ歯牙にもかけないレベルでしょ」
「お前はまたそういうことを……歯に衣を着せるということを覚えろ」
　ポカッと束の頭を叩き注意する少女はちーちゃんと呼ばれる。之助と束の会話に幾度となく出てきた名称だ。頭を痛そうに眉間を揉む姿はおおよそ学生らしくないがそれだけ友人に悩まされているということだろう。
「まったく、お前はいつまでそんなことを言い続けるつもりだ？」
「ちーちゃんこそいつまで人の頭を叩くのかな。注意する度に叩かれてると私の脳細胞が死滅しそうなんだけど」
「破壊された分、超再生で強くなるんじゃないか？　よかったな束」
「それ脳筋のちーちゃんにしか適応されないから」
「誰が脳筋だ」
　ちーちゃん、いや織斑千冬は思わず叩こうとしたが、その手を止めてニヤリと笑みを浮かべた。そのらしくない様子に束は不気味さを感じる。
「しかし、束が私以外と話しているのを見ることになるとはな。お前も私以外の友人が出来るとは度肝を抜かれる思いの半面、安心もしたぞ」
「ちょ、あれとのこと？　冗談でしょ。私はあれと友達になった覚えなんてないよ。あれが毎度毎度勝手に話し掛けてきて作業の邪魔をするし相手しないとしないで鬱陶しいから適当に返してるだけで友達とか臍で茶釜が爆発するよ」
「フッ、そんなに意地になるな。私も私以外の友人が束に出来たからと嫉妬するようなことはないぞ」
「出たよ、ちーちゃんの変なところで頓珍漢で鈍感なところが！」
　キィー！　と奇声を上げる束を笑って見ている千冬はしかし内心ではある程度察していた。束が友人と思ってはいないだろうという

ことは浅くない付き合いから嫌でもわかる。
だから真に友達ということはまずない。そうであれば束の性格上否定することはない。だが逆に本気で嫌ならコミュニケーション自体を放棄する質でもある。なら会話が形だけでも成り立っていたあの男は、もしかするとという期待もあった。
なにが束の琴線を掠めたのかはサッパリであったが。
「でも話をしてたのは認めるよ」
「ほう」
「あれは理解力があるから、話しが通じるからつい喋ってしまうってことはあるね」
それもそのはず。彼の前世の２０年の経験がある。知識を抜きにしても、小学校を卒業して間もない１０代半ばの少年少女と２０歳の理解力には差があるに決まっている。
裏を返せば２０年のハンデを持ってしてようやく、現在中学生の束の話を大まかに理解できてるということなのだが。
「そうかそうか」
「なんでちーちゃんはしたり顔で頷いているのかな？」
このままであれば、いつか束が之助（彼）を友人と呼ぶ日も近いんじゃないかと千冬は思った。

――思い違いだった。

そんな日は来ないまま、変わらぬ日常を繰り返して篠ノ之束、織斑千冬、浦之助の３人は中学校という義務教育を終えたのであった。
篠ノ之束と織斑千冬は親友。篠ノ之束と浦之助は会話することのあるクラスメイト。そこは変わらず、それ以上にもそれ以下にもならなかった。
高校は３人とも同じであった。理由は皆一様に家が近いから。しかし、より具体的に言えば家族のためや無駄を省くためや前の経験からある程度であれば何処でもいいからなど、てんでバラバラなのがミソ。

「之助、同じクラスだったか。同じ中学の顔見知りがいるとは安心したぞ」
「ははっ、ちーちゃんはそういうキャラじゃないでしょ。ひとりでもカリスマ振り撒いてなんとかやれる系だ」
「よせ、私はそんなに器用ではない」
「器用じゃないのは知ってる」
「おい」
　変わったことと言えば篠ノ之束の親友とクラスメイトの縁が繋がったこと。
「しかし、いい加減ちーちゃんと呼ぶのは止めてくれないか。何処か恥ずかしいのだが」
「初期の刷り込みってなかなか直らんもんでさ。篠ノ之がちーちゃんちーちゃん言うから織斑見ると〝あ、ちーちゃん〟って反射的にだな」
「つまりまた束が悪いわけだな」
「さすがに冤罪だよちーちゃん!?　ふざけんなよお前!」
　――他人から一歩進んだ彼らの関係はまた高校（ここ）から変化を遂げる。